

ポストモダンの社会と社会意識

——意識の連関をめぐって——

松戸 武彦

1. はじめに

東浩紀が『動物化するポストモダン』を著したのは2001年であった¹⁾。もちろんそれ以前からポスト・モダンに関する議論はいろいろな分野でなされてきていた。しかし、社会学、あるいはその周辺領域でポスト・モダンの議論を目に見える形で論じたのは上述した彼の論述に一つの起点を見るのはそれほど過ちではないであろう。彼の議論は直接には、この分野の先行する論説である、岡田斗司夫の『オタク学入門』や大塚英志の『物語消費論』を評論の対象にして、それを乗り越える形でなされている。しかし、そこには「データベース消費」と「動物化」というキー・タームを挿入することによってそれまでの世界とは連続した要素を持ちながら、新たな時代の到来を宣言するものとなっていた。

端的に言うと、ここでは、シミュラクルという二次創作がさらに断片化、要素化され、データベース化されることによる、「創作」の意味の根本的変化が語られており、他者を必要としない、つまり他者とのコミュニケーションを必要としない（アメリカ型）消費社会の出現を哲学の伝統に沿って「動物化」という言葉でとらえている。動物は、人間の自己意識や反省的思考の代わりに本能に従って欲望し、行動する。同様に、ポスト・モダンの世界は、「マニュアル化され、メディア化され、流通管理が行き届いた現在の消費社会においては、消費者のニーズはできるだけ他者の介在なしに、瞬時に機械的に満たすように日々改良が積み重ねられて」²⁾おり、そこでの行動は本質的な意味で動物化という用語に値するものになっているとされた。

それから15年の後に出版された大澤真幸の『自由という牢獄』には次のような言葉が書かれている。公共性という側面からポスト・モダンを論じたこの本自体の大半は、2000年前後に書かれた論説をあらためて書籍としてまとめたものである。しかし、ここで注目する部分は「はじめに」の部分で、そこは2015年の書下ろしである。大澤は、そこで、10年以上前に書かれたもとの論文の内容が、当時よりも現在においてより一層妥当していることに驚いている。そして、当時は、純粹化したり、誇張したりして論じたことが現在ではそのまま現実になっていると述べている³⁾。そ

1) [東 2001]

2) [東 2001 : 127]

3) [大澤 2015 : vii]

ここでは、東浩紀が世紀の転換点においてオタク論として一副題が、オタクから見た日本社会となっている一展開した、いささか斜に構えた社会評論の内容が2015年の時点では平凡な、それだけに強固な現実そのものになっているという驚愕が率直に述べられていたと解されよう。

本稿の問題意識もこの驚きを基本的に共有する。東浩紀が、アニメやゲームを媒体として論じた社会現象は、それだけに当時は、社会の表象的な出来事の集まりとしてとらえられてきたように思える。つまり、この社会をいざなり、特徴づけていることはまちがいないが、それでも社会の中心的な事、大切な事というよりも一部のマニアックな人々をとらえている表面的な現象にすぎないという思いである。しかし、大澤の文章は、東浩紀が対象にしたオタク的社会現象を貫いている原理が、いまや現実世界の中で普遍的で確固たる位置を占めるに至ったことに言及しているのである。その意味で、時を同じくして、ピケティの『21世紀の資本』やコーエンの『大格差』⁴⁾などの著書が人口に膾炙したことは偶然ではないだろう。これらの著書はオタクとは対照的な経済現象を扱っているものであるが、いずれも近代の終焉を描き出しているものと考えられる。その意味で、いまやオタク現象の深部に働いている社会的構成原理と、全く異質な知的営為としてみなされてきた経済学のコアな論理展開が、現実によって架橋されたと言えよう。我々は時代の決定的な変化に臨んでいるのである。

これらの著述の中で共通する内容を稲葉振一郎の議論を借りてまとめてみよう⁵⁾。そこでは近代の権力の在り様を「規律訓練型」としてとらえ、ポスト・モダンのそれを「環境管理型」として考えられている。つまり、公共性の在り方を論ずる中で彼は、20世紀の終わりから徐々に姿を見せ始め、21世紀を基本的に方向付ける構造変動を上述した概念でとらえようとしたわけである。近代は規範の主體的内面化によって秩序形成がなされ、自立した個人の集まりから公共性は形成されるとした「モデル」に立脚している。他方、ポスト・モダンシステム側の強化によって、人々は主體的な行為の意味について考えることなしに秩序が保たれる社会を内容としている。なぜ、その行為は悪いのか主體的に反省し、規範を内面化することではなく、そもそも悪いとされる行為ができなくなるように社会がシステム化されている状態と言ってもいいだろう。

このような事柄について理解するためにきわめてよい例が次のようなものである。新交通システム「ゆりかもめ」に次のようなシートが採用され、電車内の足投げ出しの苦情がなくなったという新聞記事である。従来から混みあう車内で足を投げ出して座る人が多く、車内放送で注意を呼びかけてもなかなか改善されなかったというのがこの発端である。これに対し、「ゆりかもめ」側は、新型車両の座席をひざ側に9度上向くように設計したと言う。これにより、乗客は自然にかかとを引く姿勢で座ることになり、足の投げ出しがなくなったと言う⁶⁾。

ここにはマナーや規範の内面化が著しく困難になった社会における迷惑行為への対処法がよく表れている。つまり、注意を促す車内放送では如何ともし難いような状況が日常化する中で、業を煮やした運行会社側が、人々の「正しい」意識に頼らず、「システム」によって問題を解決しようとしたことがはっきりと書かれているのである。ここでは、足を投げ出す人がいなくなったというより足を投げ出すことができなくなったという表現の方が適当であろう。ここでは、まさしく稲葉のいう「環境管理型」の対処法が工夫されていることになる。そこでは、猫や犬が反省的吟味や主体

4) [トマ・ピケティ 2014] [タイラー・コーエン 2014]

5) [稲葉振一郎 2008: 183-197]

6) 朝日新聞デジタル 2014年10月23日

的思考によって徘徊のみちを決めているのではなく、自然にそうなるようにしていると同様に足を投げ出すのが悪いから投げ出さないのではなく、座ると自然に足を投げ出さなくなるという仕組みが働いているのである。そこには、近代が前提とした、社会を形成していく最も基本的な「アイテム」としての自立した個人の心性や一貫した性格、反省的思考などが背景に退き、システムの側の自動性が前面に出てくることが描かれている。そして、この事例は、まさしく大澤が慨嘆したように、ポスト・モダンが社会の中に根を下ろし、日常化し、「血肉化」して作動していることを表していよう。我々は、このシステムの自動性という枠の中でのみ「自由」に行動することができるのである。

このように考えてみると、それぞれの論者は、こうした機序の帰結を、ゲームに熱中するオタクの中に探ったり、ピースボートによる世界一周の旅に参加した若者たちの意識と行動の中に見たり⁷⁾、中間階層の大幅な縮小とその問題性を論じたりしていることになる。一貫した個性や性格の持つ意味の衰退を論じた土井隆義のキャラ化に関する議論もこうした流れの中にあることはまちがいないであろう⁸⁾。いずれにしても、核となるのは、主体性の持つ意味の変化とその社会的帰結である。

いまひとつ、ピケティやコーエンの文脈により近い事例を紹介してみよう。以下は、著者が実際に見聞した事例であり、それが生産現場の中で生じているという点でポスト・モダンの論理の現実化と言ってもよいような事例である。

2014年の日本労働社会学会における工場見学は関東地区の自動車製作工場であった⁹⁾。そこでは、昨今の大企業の組み立てラインならどこでも見られるように自動化されたラインが動いていた。しかし、その工程を注意深く見ると従来の自動化とは一線を画す仕組みが内化されていた。つまり、すべての工程にそれぞれコンピュータに接続されたセンサーが取り付けられており、作業員の仕事はそうした、センサーによって「自動的に」コントロールされているように見えたのである。より具体的に言うと、例えば、ねじを締める作業の場合、3回転させねばならない時、作業員が2回転半で終わらせたとしよう。その場合従来ならば、工程の区切りのところまで運ばれた半製品は班長や検査部門の検査によって瑕疵が発見され、締めなおされることになる。その場合、2回転半で終わらせた作業員は、熟練の不足や注意力の欠如を指摘され、訓練や自覚によって以後このようなことの無いように指導されるか、あるいは罰金や処罰によって不利益をこうむり、態度や行為をあらためるといったことになったはずである。

しかし、この工場では、こうしたねじの締め忘れが生じた場合、センサーが作動し赤ランプの点滅と同時に工程が停止することになる。そして、近くの作業員がそこに行って締めなおすだけである。そして、この場合、ミスを出さないようにするという on the job トレーニングとしての作業員の機会はほとんど無く、いくなればミスができないシステムの上で働いていることになる。この時ミスは許されないのではなく、ミスがそもそもできなくなっていると言ってよいだろう。したがって、この工程においては、作業とはセンサーが感知した不具合の場所に行き、マニュアルに従って対処することになる。

このことのより深い意味は、見学後に行われた質疑応答の際により明らかになる。そこでは、こ

7) [古市 2010]

8) [土井 2014]

9) 2014年10月24日に行われた京浜地区A工場での見学

うした工場見学ではお定まりになっている、正規—非正規従業員の比率に関して質問がされた。そして、担当の方の答えは概略以下のようであった。

以前は、正規従業員が95%で非正規従業員が5%であった。正規の比率をこれよりも低くすると決まって不良品が出てきて困るので、この比率を守ることが人事の重要な仕事であった。このような答えに対して当然、「では現在は」という質問が重ねられた。それに対して今は50, 50であるというものであり、この点での支障は今のところ無いというものであった。つまり、このことは非正規従業員といえども短期間で仕事を覚え、作業に問題はほとんど起こらないということである。

以上のような状況が前述したセンサーによって管理された「ミスさえできない」工程に由来することはほぼまちがいない。ミスさえできない工程で働く作業員は、基本的に誰でもよく、感知されたセンサーの指示に対処するだけである。そこでは基本的な責任感などの心性が表面化されず、グループ作業における工夫なども基本的になくなるらしい。この工場では、正規、非正規従業員とも同じ工程の中で働いており、その差はまさに正規—非正規という従業員上の地位自体の差として現れることになる。このような場での技能の向上についても訊いてみたが、0.01秒単位の動作の速さに還元されるらしかった。これでは反射神経の差と言ってもよいようなものである。

そして、また、この工場では、高度なエンジンの組み立てもしていて、そこでの光景は上述した工程とは全く様相を異にしていたことも付け加えなければならない。それは、自動車レースを対象にしたエンジンの組み立ては少数の超熟練工の手による一種の手作りのような形をとっている点である。こうした熟練工は組み立てたエンジンに自分の名を刻むことができる存在だが、焦点はこれらの人々の養成課程である。こうした高度熟練工の養成は、山にひろがった裾野から一步一步上がっていくという従来イメージとかなり違ったものになっていた。つまり、こうした人々は初めから少数に絞って特別な訓練や教育をへてなるものであった。その意味で、養成課程の異なる少数のエリートである。イメージとしては、オリンピックの金メダル獲得のために少数の素質優良者を選び、その人たちを集中的に訓練する形に近いであろう。したがって、従業員の組成に関しては、正規—非正規という区別よりも、センサーのコントロールの下で働く大半の作業員と初めからエリート養成の課程に乗った超熟練工目標の人々の集まりになる。まさしく、タイラー・コーエンが描くポスト・モダンの具体的職場風景であった。東浩紀や大澤真幸といった「理論社会学者」の描く世界が、工場労働の中で具現化していることにショックを受けた感覚を筆者は今も覚えている。

では、このように日常的世界の中にしっかり根を下ろしたポスト・モダンの論理は人々にどのように対応しているのだろうか。古市はピース・ボートから帰った若者たちの事例を通して、ポスト・モダンの世界で、ある種動物的に生きていくことの「快感」「ゆったり感」を肯定的に考えているように見て取れる。これに対しては、本田由紀が同じ本の解説、反論としてゆるく生きることの問題性を指摘しているが、古市自身はこうした批判に「畏れ入っている」ようには見えない。では、普通の人々はどうであろうか。本稿はこうした問題意識に立って小規模ながら大学生に対して実施したアンケート調査の結果からポスト・モダンの世界で否応なしに生きる若年者がどのような社会意識の下で日常生活を構成しようとしているのかを探る索出的試みである。

2. 意識調査の結果—ポスト・モダンとその意識の特徴

調査は、2015年6月に単一の授業を受けている大学生に対して実施された。回答は159人からあ

た。質問は、上述した文献を中心に、過去に実施された調査で使われた質問文なども参照して作成した。データの主なプロフィールに関しては、以下のとおりである。

表1 性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男	54	34.0	34.4	34.4
	女	103	64.8	65.6	100.0
	合計	157	98.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	1.3		
合計		159	100.0		

表2 学年

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1年生	127	79.9	80.4	80.4
	2年生	12	7.5	7.6	88.0
	3年生	16	10.1	10.1	98.1
	4年生以上	3	1.9	1.9	100.0
	合計	158	99.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.6		
合計		159	100.0		

表3 世帯主の職業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	会社員	109	68.6	69.0	69.0
	自営業	27	17.0	17.1	86.1
	専門職(含教員)	4	2.5	2.5	88.6
	公務員	13	8.2	8.2	96.8
	その他	5	3.1	3.2	100.0
	合計	158	99.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.6		
合計		159	100.0		

表4 アルバイト週何回

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	無	33	20.8	20.8	20.8
	週1	14	8.8	8.8	29.6
	週2	42	26.4	26.4	56.0
	週3	48	30.2	30.2	86.2
	週4以上	22	13.8	13.8	100.0
	合計	159	100.0	100.0	

表5 通学時間

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	30分以内	17	10.7	10.7	10.7
	1時間以内	31	19.5	19.5	30.2
	1時間半以内	44	27.7	27.7	57.9
	2時間以内	48	30.2	30.2	88.1
	2時間超	19	11.9	11.9	100.0
	合計	159	100.0	100.0	

まず、単純集計から見てみると次の項目に関する回答の分布が興味深い。

表6 企業への就業

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	1.00 大企業仕事は定型的	65	40.9	40.9	40.9
	2.00 規模小発想生かせる	37	23.3	23.3	64.2
	3.00 中規模社風和気藹藹	57	35.8	35.8	100.0
	合計	159	100.0	100.0	

これは、企業規模に関連させた形で企業の風土の選好を訊いたものである。大企業の安定性を選好する学生が多数を占めるのは予想通りであったが、和気藹藹の社風も35.8%の支持があった。多くの文献で人間関係、それも軽やかで楽しい人間関係に対する関心の比重増加が指摘されてきた。この点で、中規模でも和気藹藹が好まれるという結果は示唆的である。他方、1990年代には支持が多かった自分のやりがいがあるような企業への人気は陰っていることは、この調査でもはっきりした。概してこの質問項目に関しては、今までの調査と総合的であると言える。

表7 自分に合っている大学

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	1.00 積極的勉学単位取得 厳しい	83	52.2	53.2	53.2
	2.00 単位取得ゆるいが指 導あまりない	73	45.9	46.8	100.0
	合計	156	98.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	1.9		
合計		159	100.0		

これは、少し驚く結果になった。ほぼ二つの選択肢が拮抗している。このような質問は授業中에서도従来したことがあるが、その時には積極的学習を支持する割合がもう少し高かったと思う。その点で表6の結果と整合する形で「和気藹藹」とか「ゆるさ」が選択のキーワードになっているように見える。

表8 人生深刻に考えず愉快地に

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	1.00 本当にそう思う	38	23.9	24.4	24.4
	2.00 まあそう思う	76	47.8	48.7	73.1
	3.00 あまり思わない	34	21.4	21.8	94.9
	4.00 思わない	8	5.0	5.1	100.0
	合計	156	98.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	1.9		
合計		159	100.0		

この点の表8の結果も同様の方向を示唆している。人生深刻に考えずに愉快地に生きる方がよいという意見に、併せて73%余りが同意している。深刻に考え、自分を鍛えるという考え方に魅力は大きく減じている。

表9 真面目に努力でも社会的地位低理由

		度数	パーセント	有効パーセン ト	累積パーセン ト
有効	1.00 人づきあい下手	54	34.0	34.0	34.0
	2.00 縁故が無いから	19	11.9	11.9	45.9
	3.00 親の社会的地位低	9	5.7	5.7	51.6
	4.00 才能無	27	17.0	17.0	68.6
	5.00 努力と地位関係なし 社会	21	13.2	13.2	81.8
	6.00 運が無い	29	18.2	18.2	100.0
	合計	159	100.0	100.0	

これは、努力と成功の関係について訊いたものである。ここで注目すべきことは、最も割合が多かった「人づきあいが下手」という項目である。現代の若者にとっては人間関係構築の巧拙が人生の成功に直結するという感覚が強いことがわかる。良好な人間関係の構築こそ第一優先に考えなければならないという、ポスト・モダン系の若者論に共通する論点をよく反映している結果だと考えられる。

表10 皆がよくなる前に私を助けてくれ

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1.00 強く共感	13	8.2	8.2	8.2
2.00 どちらかという共感	61	38.4	38.4	46.5
3.00 どちらかという共感無	69	43.4	43.4	89.9
4.00 共感無	16	10.1	10.1	100.0
合計	159	100.0	100.0	

この質問は、筆者が「私を助けてくれ」問題として考えていることを反映した項目である。ポスト・モダンの社会は、ポピュリズムの価値観と親和性が強いと考えられるが¹⁰⁾、この点が考察の対象になっている。土井が指摘しているように、人間関係を作っていくうえで組織や集団、あるいは既存社会団体の意義が小さくなっている¹¹⁾。この流れの中で、仲間みんなでよくなっていくことのリアリティが減じ、私が救われれば良しとする考え方が若者を、そして若者だけでなく年齢に関係なく人々をとらえていると考えられる。この点で、併せて46%の学生たちがこの考え方を支持していることになり、半数近くの割合になっていることになる。

表11 学校での勉強よりバイトの経験役立つ

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1.00 同意	18	11.3	11.3	11.3
2.00 どちらかという同意	72	45.3	45.3	56.6
3.00 どちらかという不同意	61	38.4	38.4	95.0
4.00 不同意	8	5.0	5.0	100.0
合計	159	100.0	100.0	

学校での学習の持つ意味が生徒や学生の間で急速に低下していることはつとに指摘されてきた。

10) この点で、筆者がここ数年続けている中国の信訪研究とつながっている。詳しくは以下の文献に譲るが、現在の中国の体制がポピュリズム的志向性を強く持っており、この点で西側諸国とは異なる形と内容を持つが、そこでもポスト・モダンの世界であることは相違ないと考えられる。[松戸 2013 2014a 2014b 2015a 2015b]

11) [土井 2014 : 9-10]

この文脈でこの質問を考える時に、ブラックバイトなどの現象がよく理解できるように思える。つまり、人生で大切なことを、社会に出る前に、ある程度系統的、かつ権威を持って教えてくれるのはいまやバイトの中での各種経験になっていると考えられる。断片化され、意義が感じられない学習は彼らの人生を基本のところから方向付けるものにはなっていないということをこの結果は示している。

総じて、これらの質問項目に関する意見の分布を見る限りで、アンケートに回答した学生たちは、ポスト・モダン的な社会意識を色濃く持っている人々だと考えられる。

では、このような意識はどのような関連性の中でどのような構造的性を持っているのだろうか。このことを調べるために以下9つの質問項目を使い、主成分分析をかけて分析していくことにする。因子の抽出は主成分分析、回転はバリマックス法を使用した。結果は3軸が抽出され3軸で累積46.197%の説明力があった。

表12 回転後の成分行列^a

	成分		
	1	2	3
人生深刻に考えず愉快地	.565		-.436
社会複雑一般人理解不能			.426
皆がよくなる前に私を助けてくれ	.703		
学校での勉強よりバイトの経験役立つ	.647		
同一クラス員でも付き合い unnecessary		.554	
社会の本当の状況知ること怖いから考えない	.481		
LINETwitterの方が学校の同僚より気が落ち着く		.747	
将来の自分を考えて今の行動決めるタイプか			.849
教科書に載るような文学作品論説文読まない		.564	

因子抽出法：主成分分析

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法^a

a. 5回の反復で回転が収束しました。

まず、それぞれの軸の内容である。第1軸は「皆がよくなることよりも私をまず助けてくれ」という項目が高い値を示している。そして、その次に高い値を示しているのがバイトの経験が役立つという項目である。そのほか、深刻に考えない、社会状況は考えるのが怖いから考えない、という項目が上がってきている。つまりこの4項目に強い関連が見られるということである。これら4項目は総じて目先のことに拘泥する感覚である。言い換えると自分の狭い生活世界の中の安楽に閉じこもりとする意識であると言えよう。この意味で、第1軸は、「生活世界埋没軸」と命名することができよう。社会の状況や人生の深刻な状況について考えたくないという志向、バイト経験への信頼を考慮すると、反知性主義的方向性も併せ持つ軸だと考えられる。

第2軸はクラスメイトだからと言って付き合い必要を認めないとかtwitterの方が気が落ち着くなどの項目をみれば、まさしく既存の集団や組織の意義の低下を示している軸だと考えられる。しかし、それに加えて、定評のある文献や作品を読む気が無いことと連動している。このことは、友達をどこで見つけるかということが自分の気に入っている人のみと付き合いという志向と重なって

いることを示しており、その道具としてのインターネットの活用が示されていると考えられる。しかし、一方でその世界は文学作品に見られるような射程の広い、抽象度が高い世界と自分をつなげるという形で考えられていない。あくまでの努力とは関係ない、居心地の良い小さな世界である。この点でバーチャル指向軸ととりあえず呼んでおくことにする。

第3軸の結果はきわめて興味深いものになった。この軸で最も高い値を示したものは「自分の将来を考えて今の行動を決める」というものである。その点でこの軸に高い親和性を持つものはポスト・モダン性から遠い人のように見える。その点で、深刻に考えずに愉快に生きるという生き方とは反対の方向性を持つことは大変理解できることである。しかし、一方で、こうした人が同時に社会が複雑だからその動きがわからないと言っていることになる。これは何を意味するのだろうか。

将来を考えて今の行動を決めるという時回答者にとって「将来」とはどのような文脈でとらえられているのだろうか。社会に対しては複雑すぎてわからないと言っているのだから、この時の未来は範囲の狭い、直示的な在り様を指しているように思える。つまり、自分を取り巻く大きな社会の文脈の中で自分の未来を想定し、その中で自分の行動を決めていくのではなく、はっきり見える直接的な目標に焦点を絞り、その限りで、行動の方向性を決め、努力もするのだと言っているように見える。

確かに、ポスト・モダンの世界は動物化することによってプランとか、希望とかを念頭に置いて自己の判断を繰り返していろいろなことに対処していくという側面が急速に弱まる世界である。しかし、人間である以上、完全な動物化は時間感覚を獲得した人間にはそういうことをすべて放棄することはできそうもない。むしろ、自分の世界に閉じこもってその世界の中で判断を構成していくことになるのではないだろうか。その世界の外界は結局のところ理解不能な混沌の支配するところ、または拘り無き世界として意識されているように考えられたのだ。

最後に第1軸の因子得点を「教科書に載るような文学作品は、論説文は読まない」という項目とクロスさせてグラフ化させてみる。

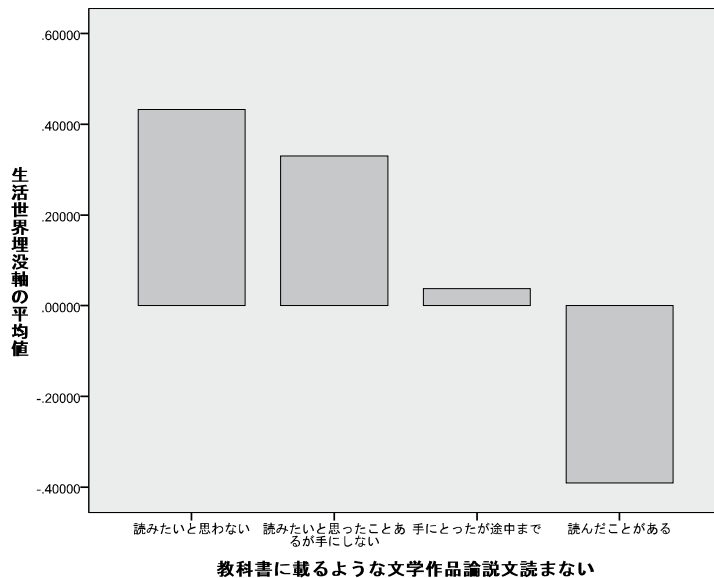


図1

非常にきれいな相関が見えてくる。つまり、文学作品や論説文は読まない傾向を示している人は、生活世界埋没度が高い人々であることがわかる。あるいは、生活世界に関する感覚の幅が狭いことが、ポスト・モダンの世界に生きる現代の若者の特徴と言っているのかもしれない。その点では大人になりきれないという表現もあてはまりそうで、そうならば若者を大人の試練にさらさない方がいいという日本の現代文化は、ポスト・モダンの先端に位置するのかもしれない。

3. むすびに代えて

このような因子分析による結果は、単に彼らがポスト・モダンの世界に生きているということだけでなく、その構造的に迫まる手がかりを与えてくれているように見える。第1軸に関しては、私を助けてくれという狭い閉じこもりの意識が人生を作り上げていくうえでのバイト体験の重要性意識と連動していることは外側、あるいは他者との共同的向上への忌避が反知性主義に関連付けられる可能性を示唆している。

第2軸はtwitterのようなインターネット世界の間人間関係への志向性がより抽象的で広い世界の知への忌避と連関していることが示されている。その意味で時空を克服しているように見えるインターネット世界、あるいはバーチャル世界は、そこでの徹底した閉じこもりと連動しているのかもしれない。

第3軸は近代世界が基礎とする行動における判断の人間的特性が、ポスト・モダンの世界では、極めて狭い、直示的世界の出来事のみに適応される物事として理解されているように見える結果であった。

従来のポスト・モダン社会の研究では一つ一つの属性が問題にされることはあってもそれらの連動性、親和性、ひいては構造的に着目する視点は少なかったように思える。本稿は規模の小さな調査であるが、こうした連動性、構造的に迫ろうとする考察であった。そこでは、一見関連が無いように思える項目がデータ上の親近性を示していることが明らかになった。そして、その親和性は、解釈の媒介を通して、ポスト・モダン社会の理解を進める手がかりを与えてくれているように見える。今後はこのことと、日常性を深いところから方向付けているポスト・モダンの論理がどのように関係するかを明らかにしていきたい。

文献一覧

【邦文】

- 東浩紀 2001『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会—』講談社現代新書
 稲葉振一郎 2008『「公共性」論』NTT出版
 大澤真幸 2014『〈問い〉の読書術』朝日新書
 大澤真幸 2015『自由という牢獄—責任・公共性・資本主義—』岩波書店
 タイラー・コーエン 池村千秋訳 2014『大格差—機械の知能は仕事と所得をどう変えるか—』NTT出版
 土井隆義 2014『つながりを煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える—』岩波ブックレット
 トマ・ピケティ 山形浩生他訳 2014『21世紀の資本』みすず書房
 古市憲寿 2010『希望難民ご一行様—ピースボートと「承認の共同体」幻想—』光文社新書
 松戸武彦 2013『中国社会的市民社会性と信訪制度—農民意識調査を手がかりとして—』『アカデミア』社会科学編

第 5 号, 南山大学 pp. 49-69。

松戸武彦 2014 年 a 「行為としての信訪（陳情）とその社会運動性—農民意識調査を手がかりとして」『アカデミア』社会科学編 第 6 号, 南山大学 pp. 49-65。

松戸武彦 2014 年 b 「陳情（信訪）経験と社会的態度形成—社会運動論と社会的経験—」『アカデミア』社会科学編 第 7 号, 南山大学 pp. 21-39。

松戸武彦 2015 年 a 「中国における市場経済化の現段階と統治スタイル—2003 年調査と 2013 年調査の結果の比較から出発して—」『アカデミア』社会科学編 第 8 号, 南山大学 pp. 27-43。

松戸武彦 2015 年 b 「中国の強権国家化と社会意識—信訪制度に関する意識調査をめぐって—」『アカデミア』社会科学編 第 9 号, 南山大学 pp. 45-60。

本稿は「科学研究費補助金（基盤研究（C）：一般）平成 27 年度（課題番号：15K03890）」の研究成果の一部である。

また、「2015 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」による研究成果の一部である。

Post Modern and Social Consciousness

Takehiko MATSUDO

要 約

ポストモダン社会の社会意識をまず先行研究へのアプローチから考えてみた。そこでは、いろいろな言説が見られるが、東浩紀の動物化という概念が一つのとっかかりを与えてくれるように見える。そこでは、近代が予定したような自分で主体的に判断する人間像が後景に退き、システムの側からの管理が著しくなり、そのことに人々の志向性も同調的になるようであった。このことを踏まえて本稿ではアンケート調査を使用し、学生＝若者たちの社会意識の特性を考察した。その中で思わぬ意識の連関性が見出された。